

第2号様式（第4関係）

令和6年11月8日

調布市議会議長 井上耕志様

提出者 調布市議会副議長 内藤美貴子

視察等共通部分報告書

下記のとおり、視察（~~研修~~・視察研修）を実施いたしましたので、視察等個別部分報告書（第3号様式）を添えて報告いたします。

記

1 実施名称（テーマ）

令和6年度長崎市平和都市交流

2 実施期日（期間）

令和6年10月2日（水）から10月3日（木）まで

3 実施場所（視察先・研修会場）

平和公園・長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館・長崎県防空本部跡（立山防空壕）

4 実施目的

原爆資料館や原爆死没者追悼平和祈念館、原爆遺構などを視察し、長崎市議会議長を表敬訪問することにより、自治体による平和への取組について認識と理解を深める。

5 参加者の氏名

井上耕志、内藤美貴子、松野英夫、磯邊隆、沼田亮、藤川満恵、木下安子、岸本直子、古川陽菜、須山妙子、宮本和実、鈴木宗貴、大須賀浩裕



## 6 実施結果（視察概要・研修概要）

### (1) 平和祈念事業

#### ア 日時及び場所（視察事項）

- ・令和6年10月2日（水）

平和公園，長崎原爆資料館，国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館，  
家族・交流証言講話

- ・令和6年10月3日（木）

長崎県防空本部跡（立山防空壕）

#### イ 説明及び対応者

- ・長崎市平和推進課職員
- ・長崎市被爆継承課職員
- ・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館館長
- ・家族・交流証言者

#### ウ 概要

長崎市の平和行政の新たな柱である「平和の文化の醸成」や，被爆の実相を継承する主な取組について，それぞれ担当者から資料を用いて説明を受けた。

これまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」「核兵器廃絶の推進」に加え，令和3年度からは「平和の文化の醸成」を新たな柱として加えた。多くの人が当事者として，自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるよう，スポーツや芸術などを入り口として，日常の中に「平和の文化」を根付かせるための取組として，「平和の文化認定事業」「平和の新しい伝え方応援事業」「平和の文化キャンペーンの展開」などの各種事業について説明を受けた。

続いて，被爆の実相を継承する主な取組として，「県外原爆・平和展」「青少年ピースボランティア育成」「青少年ピースフォーラム」「青少年平和交流」「平和学習発表会」「平和学習教材配布」「語り継ぐ被爆体験」について，予算額なども含めて具体的な説明を受けた。

家族・交流証言者講話では，自身の家族から聞き取った被爆体験や，戦前，戦後に体験した出来事等について，写真やスライドと共にお話を伺った。

また，行程の中で平和公園内の平和祈念像などのほか，国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を訪問し，原爆の犠牲者を追悼するとともに，長崎原爆資料館，原爆投下時に県知事等が指揮を執っていた長崎県防空本部跡（立山防空壕）を視察し，原子爆弾の惨禍について認識を深めた。

—平和公園—



—長崎原爆資料館—



—家族・交流証言講話—



—国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館—



## (2) 長崎市議会議長表敬訪問

### ア 日時及び場所

- ・令和6年10月3日（木）午前10時から  
長崎市役所5階 議会特別会議室

### イ 対応者

- ・長崎市議会 岩永敏博議長
- ・長崎市議会事務局 議事調査課長，ほか2人

### ウ 概要

出席者の自己紹介，長崎市議会議長の挨拶に続き，井上耕志議長から視察受け入れに対する謝意を伝え，訪問の趣旨を述べた後，意見交換を行った。

調布市と長崎市の平和交流は，平成15年8月の調布市非核平和都市宣言20周年記念事業の一環として，調布市の小中学生の親子2組が青少年ピースフォーラムに参加したことが最初であった。その後は，会派の視察や調布市としてピースメッセンジャーの派遣やピースフォーラムへの中学生の参加など平和祈念事業を進めており，調布市と長崎市との今後の相互交流などについて意見交換を行った。



7 その他

特になし

8 実施結果に対する所感，意見等

視察等個別部分報告書のとおり

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	井上 耕志
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和6年度 長崎市平和都市交流 長崎県長崎市 平和祈念事業について		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>令和4年から始まった長崎県長崎市との平和都市交流は本年三年目を迎えた。平和公園，原爆資料館，原爆死没者追悼平和祈念館をはじめ，立山防空壕の現地視察も行わせていただいた。</p> <p>本年の特徴としては，被爆者の高齢化が進み，被爆者から直接体験を聞くことが難しくなる中，被爆二世の大越富子氏の家族証言者としてのお話を伺うことができたのが特筆される。ご本人が直接被爆されたわけではないが，被爆した両親の心情などに子供として触れたその実体験を直接聞かせていただくという経験は，改めて多くの方々に触れていただかなければならないと感じることとなった。</p> <p>あわせて表敬訪問させていただいた長崎市議会では岩永敏博議長とも意見交換の機会を頂戴し，岩永議長も被爆二世として感じられた想いを語っていただく貴重な場面にも立ち会うことができた。</p> <p>被爆地の市議会として「長崎を最後の被爆地」にするため、世界の恒久平和に向けた不断の努力をなさっている長崎市議会の活動に対しては，本市議会としても，さまざまなお手伝いを積極的に行っていくべきとの考えに至ることとなった。</p> <p>本市においても戦争の悲惨さを風化させない様々な取組をこれまでも実施してきているが、特に若い世代に証言者の直接の声を聴くことができる場面を提供していくなど，より実感を伴うことができる場面を作っていくことの大切さを感じた。多様化する現代社会において、当たり前の中の日常の中に「平和」を意識することができる施策の展開について、今後とも引き続き事例の研究を行ってまいりたい。</p>		
3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）		
文中に記載。		

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	内藤 美貴子
1、視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
長崎市平和都市交流		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>1945年8月9日の午前11時2分、長崎に原子爆弾が投下され、長崎市の人口約24万人のうち、死亡73,884人、負傷者74,909人で人口の3分の2の方が犠牲となった。放射線は長い期間にわたり、人体に深刻な障がいを与え、直接やけどをしなくても内部被爆で多くの方が亡くなっている。</p> <p>今回の視察では、原爆による被害状況や死者の追悼、長崎市の平和行政の取組について説明いただくとともに、広島に原爆が投下されたことを受けての対策会議を行った場所等の現地視察を行った。</p> <p>&lt;原爆資料館&gt;</p> <p>この施設では、原爆投下直後の長崎の惨状が再現された展示や、遺品や被爆の資料、被爆の惨状が示された写真・映像資料等の展示が行われている。さらに、平和学習や講演会、被爆者による体験講話も行われており、原爆による被害の実相を学ぶことができるとともに、核兵器開発の歴史や現代の核兵器に関しても知ることができる。</p> <p>&lt;国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館&gt;</p> <p>この施設は、原爆による死没者を追悼し、被爆者の写真や回想の展示、被爆者や家族等関係者の方々から寄せられた被爆体験等が展示されている。施設内の追悼空間には、正面の名簿棚に原爆死没者の氏名を記載した名簿が収められており、この名簿棚の方向に原爆落下中心地があるとのことで、原爆で亡くなられた全ての方々を追悼し、永遠の平和を願う場所となってい</p>		

る。

#### <長崎県防空本部跡（立山防空壕）>

ここは、太平洋戦争中、県の防空施策の中心的役割を担っており、空襲警報が発令されると県知事や警察幹部等の要人が集まり、警備や救援・救護等の対応について指揮・連絡手配にあたっていた場所で、知事室・警察部長室・防空監視隊本部等が配置されていた。

1945年8月8日、県知事のもとに広島に投下された原爆（当時は原爆だとは知られていない）の被害の情報がもたらされた。これを受け、翌9日に県知事らが集まって対策会議を始めたが、11時2分に原爆が投下されてしまった。その一報を聞いて外に出たが、遙か向こうの市内で黒い煙と高いところまで雲のような煙が立ち込めていたものの、この周辺には直接的な被害がなかったことから、新型爆弾（原爆）ではないと思われていた。

説明によると、この場所は山に囲まれていたため、爆風等の被害を免れることができたとのことだった。

#### <平和行政の取組について>

令和3年（2021年）は、「核兵器禁止条約」が発効され、「被爆100年」に向けた新たなスタートの年となった。

しかしながら、国際社会に向けて核兵器の非人道性を訴えたり、国内外の次世代へ被爆体験を語る被爆者が減少し続けていくことは明らかである。それでも、被爆地長崎が歩みを止めずに前進し続けるためには、国内外の多くの人々が平和を後押しする潮流を作っていく必要がある。

そこで、これまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」と「核兵器廃絶の推進」の2つの柱に加え、新たな3つ目の柱として、令和3年度から「平和の文化の醸成」に取り組んでいる。この取組は、国内外の多くの市民が当事者として平和を考え、行動する機会づくりが重要であることから、芸術やスポーツ等を通して、その活動に入り口を増やしていくというものである。つまり、被爆者がいなくなる時代にも、歩みを止めずに前へ進むために、入り口を増やす取組を進め、平和をつくる当事者を増やしていきたいという取組である。また、その一環として、9・10・11月を「平和の文化キャンペーン期間」に設定し、国際交流の数々のイベントの開催や芸術・文化を通し

て様々な平和への取組が実施されている。

<被爆体験次世代継承推進について>

被爆者の高齢化が進み、被爆者から直接体験を聞く機会が難しくなる中、令和6年度から被爆体験を次世代へ継承するため、被爆の実相を学び、伝え、継承していく事業が実施されている。

事業内容としては、県外原爆・平和展の開催、青少年ピースボランティアの育成、青少年ピースフォーラムの開催、沖縄との青少年平和交流、市内中学生の平和学習発表会の開催、平和学習教材配布、語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）の推進等、多岐にわたる事業が展開されている。

今回、私達も直接被爆2世の方から講話をいただくことができ、原爆による被害の惨状や家族や友人などの大切な人を失った悲しみ、そして何よりもご自分が活動を始めた理由が、出産した子供にまで被爆の影響が現れたことがきっかけになったと伺い、大変衝撃を受けた。

今もなお被爆の後遺症で苦しんでおられる方々の現状を見ても、改めて核兵器のない世界を目指していかなければならないと強く決意をした。

そして、長崎市の新たな取組を参考に、一人一人が自分にできる平和行動を広げていけるよう取り組んでまいりたい。

3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

文中に記載。



第3号様式（第4関係）

視察など個別部分報告書	作成者氏名	松野 英夫
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
1. 平和祈念事業について		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>1. 平和祈念事業について</p> <p>平和公園にて「願いのゾーン」として位置づけられる祈念像区域を見学した。当公園には平和祈念像が設置されており「右手は原爆を示し、左手は平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を祈る」と作者の言葉が台座の裏に刻まれていた。その他、平和の泉、長崎の鐘といった、平和を願う場として多くのモニュメントが設置されていた。こうした、一つ一つのモニュメントに込められた思いを、現地の方々が見学者へ丁寧に説明している現場を見た時に、資料からの学びだけでなく「声」をあげて説明する大切さを改めて実感した。見学をしていた小学生達が真剣なまなざしでメモを取り、学ぶ姿を見て、こうした取組は平和教育の一環として大切な取組であると感じた。</p> <p>原爆資料館・原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆資料や被爆の惨状を示す展示品、遺影や体験記の閲覧や、原子爆弾の投下により亡くなられた全ての方々を追悼し、永遠の平和を願う追悼空間などを見学した。ここでは、長崎市で取り組まれている平和事業について視察した。被爆体験次世代継承推進事業の一つに「青少年平和交流事業」があり、長崎市と那覇市の中学生が交流し、双方の戦争被害について伝え合うなど、学び、伝えていく事で、青少年の育成を図る事業があり、これからの平和教育のための人材育成に効果を実感できる内容であった。調布市においてもピースメッセンジャーといった取組があるが、長崎市のような平和教育を学び合う取組を参考にし、多くの方々が平</p>		

和教育を学び、子ども・若者の平和への連帯を図って参りたい。また、「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進」では、自身の被爆体験を託したい被爆者から、受け継ぎたい意思を持つ方が講話を行うことができるよう支援し、次世代の講話者を養成する事業があり、実際に被爆体験を聴く機会を頂いた。実際にお話を聴き感じたこととしては、原爆資料館等での被爆の現状や資料を知ることで学ぶことも大いにあるが、やはり実体験を通した言葉には非常に重みがあるということだ。当時の惨状、戦後の生活の悲惨さ、その後の後遺症による苦労や、被爆者二世としての悩みをお聞きした時に、どれほどの悲しみを胸にしまいながら生きてきたのかを思うと、その心は計り知れない。また、こうした被爆体験などが話されるようになったのも、数年前からだという事実もあることから、語り継ぐための支援が非常に大事なことであると学んだ。長崎市の平和祈念事業において、戦争の悲惨さをどのように伝えていくのか、誰が伝えていくのか、そして、子どもたちにどのように託すのか、そうした一つ一つの事柄を常に模索しながら取り組んでいる姿勢を参考にし、調布市含め多くの自治体で生かして参りたい。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

上記に記載のとおり。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	磯邊 隆
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
<p>令和6年度長崎市平和都市交流</p> <p>10/2 平和公園・原爆資料館・原爆死没者追悼平和祈念館</p> <p>10/3 長崎市議会・立山防空壕</p>		
<p>2 実施結果に対する所感，意見等</p> <p>（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）</p>		
<p>2016年に家族で平和公園や原爆資料館を訪問していたが、今回は市の職員にガイドして頂き、より深掘りできたと思う。以前よりも外国人観光客の来館者が増えたような気がする。展示はしっかりと多言語化されており、来館の外国人たちは真剣に展示を見ていた。むしろ日本人の学生の方が落ち着きがなかったか。職員に聞いたところ、船が着くたびに大勢の外国人観光客が来ているそうである。</p> <p>被爆体験次世代継承推進としてR6年当初予算として3,500万円余計上されており、事業としての継続をしっかりと行っているようである。</p> <p>主な事業内容として、「県外原爆・平和展」が挙げられる。県外での普及啓発の事業であり、是非調布での開催も要望したい。また青少年に関する交流や発表会、学習教材の拡充など、青少年への働きかけが強いと感じた。全国的には戦争の事はあまり表に出さないような教育が進んでいる中、大切なことである。</p> <p>また、当日講話者の方から被爆二世としての被爆体験を伺った。被爆から年月が経ち、減少してゆく講話者が問題である。被爆体験者のご家族など、受け継ぎたい意思のある方を新たな講話者に育成しており、現在の登録者は家族・交流証言者113名（うち、講話可能者57名）と、維持継続できるよう尽力されている。</p> <p>調布でもピースメッセンジャーなど、平和祈念事業を行っているが、長崎市としては令和3年度から「平和の文化の醸成」としてひとつの柱としてとらえている。サッカーチームVファーレン長崎とのコラボや、青を基調とした鳩を模したロゴ、平和の新しい伝え方応援事業として広くアイデアを募集</p>		

し、事業に対して最大 20 万円を補助するなど、新たな取組も行い、風化させることなく、刷新感を持った事業に取り組まれていた。

翌日は長崎市議会にお伺いし、岩永議長にお出迎え頂き、懇談させていただきました。ピースメッセンジャーの取組を聞かれ、調布にも子供たちにきてもらうのはどうか？と打診したところ、調布はどのような平和の取組をされているか聞かれた。質問の真意ではないかもしれないが、自身としては調布ならではの平和の取組としては長崎に比べれば歴史も背景もまだまだではないかと改めて自戒した。

長崎市は庁舎がまだ新しく、議場も見せて頂いた。議員・理事者ともにお互いの顔が見渡せる円形のつくりになっており、議席には賛否の押しボタンがついており、席を立たずとも議決が取れるとのこと。また傍聴席の数も多く、親子ルームも用意されていた。

その後庁舎全体も案内頂いた。総工費 260 億、19 階建てのビルは免震になっており、入ってすぐには高齢者や障害者といった不自由な方に優しい設計になっており、セクションごとに色分けしてわかりやすくするなど、来庁者に優しいつくりになっている。断熱等もしっかりとしているようである。3Fには食堂が入っており、毎日のように来る市民の方もおられるそう。日替わりメニューもあれば長崎ならではの皿うどんやトルコライス等、ご当地メニューも比較的リーズナブルであった。県庁にも入っているレストランのシェフが兼任されているそうである。

街の中も 10/14 にグランドオープンを控える長崎スタジアムシティなど、活気を感じることができた。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

恒久的な世界平和の実現のために、この歴史上の惨劇をしっかりと後世に残すことが大切であり、そのための講話者の発掘や運用を考えていく必要がある。

調布ならではの戦争の遺産の発見、及び普及啓発もまた必要ではないか。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	沼田亮
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
長崎市平和都市交流事業について		
2 実施結果に対する所感、意見等 （質疑・意見交換した内容、今後の市政に生かすべき点等）		
<p>①平和公園</p> <p>平和公園にて平和祈念像を見学した。修学旅行の学生も多く、学生が祈念像の前で平和への誓いのような作文を朗読している場面にも居合わせた。平和の継承という観点で、学校教育の中で現地を訪問し、学生が多くのことを感じるのには素晴らしいことであると感じた。</p> <p>②原爆資料館</p> <p>原子爆弾が投下される前後での街の様子、被爆後に熱で変形した日用品や人体の壮絶な熱傷の様子など、被爆地の長崎県でしか見ることが出来ない資料を確認した。被爆直後の中心地の温度などは想像を絶するものであり、当時の惨状を想像すると、今後一切同じ過ちを起こしてはいけないと改めて認識した。別室にて、長崎市原爆被爆対策部平和推進課、被爆継承課から、現在の長崎市の取組など説明を受けた。被爆地ならではの内容が多分にあり、調布市としても長崎市との交流事業を継続していくべきと感じた。</p> <p>③原爆死没者追悼平和祈念館</p> <p>館内追悼空間は原爆死没者の名簿が納められており、永遠の平和を願う場所として、神聖な印象を受けた。手記閲覧室には被爆体験記が相当数あり、被爆当時の悲惨な状況や被爆者の苦しみを知ることができる、大変貴重な書物であった。研究室にて、被爆者ご家族による講話をいただいたが、人生で初の経験であり、感銘を受けた。教育の観点で、調布市の子ども達が講話を聴く機会を設けるのも非常に有意義であると感じた。</p> <p>④長崎市議会</p> <p>長崎市議会議長より長崎市の平和祈念事業について説明を受けた。原爆資料館にて所管部署からも説明があったが、戦争から長い年月を経た世代にとっ</p>		

て、被爆の実相などについて、共感を持って感じることはなかなか難しいとの認識のもと、新たな発想で、時代に応じた平和の新しい伝え方に取り組む事業を展開しているとのこと。関心がある分野を入り口に、身近なところから平和を考える事業、例えば、サッカーのV・ファーレン長崎平和祈念活動や長崎スタジアムシティこけら落としで地元アーティストの福山雅治さんがライブを行い、平和へのシンボルとして地域の発展に寄与するなど、自治体として様々な事業に取り組んでいる。調布市においても、FC 東京や味の素スタジアムなど活用できるコンテンツが多数あるので、長崎市との交流を継続しつつ、上手く資源を活用し、市民に対して平和を訴えていければと感じた。

#### ⑤立山防空壕

原爆投下時に防空壕内に知事室や警察部長室、防空監視隊本部などが配置された。被爆中心地に対して地形的に山が障害物となり、大破を免れた。壕の内外に安全性を確保する補修工事を行い、2005年11月から一般公開している。被爆の実相を体感することができる、貴重な施設であると感じた。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

①ピースメッセンジャーの取組など、被爆自治体との平和祈念交流事業の継続と更なる推進。

②今なお、世界では戦争の最中にある国があるが、他人事ではなく、日本人の立場で何ができるのか。また、もし戦争の当事者になってしまった場合に、平和を祈るだけではなく、自らの命を守るためにどうすべきなのかを考えていく必要がある。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	藤川 満恵
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
平和祈念事業について(長崎市)		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
【平和祈念事業について】		
現地視察(原爆資料館・追悼平和祈念館等)		
<p>中学の卒業旅行で訪れた長崎の原爆資料館で見た一発の原子爆弾の恐ろしさに、戦争は絶対に起こしてはならないと、平和の尊さを命に刻んだ体験より久方ぶりの訪問となった。1996(平成8)年に建て替えられ、更にストーリー性のある様々な展示に、改めて、「戦争ほど残酷なものはない、戦争ほど悲惨なものはない」と、平和への誓いを胸に見学させて頂いたが、案内して下さった方の「被爆3世です。」との言葉に、戦争は続いているのだと胸が熱くなった。</p> <p>併設されていた「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」では、印象的な追悼空間の中、原爆死没者の追悼と恒久平和を祈念させて頂いた。多くの体験記、証言記録が閲覧できるようになっており、日本のみならず世界中の多くの人々に閲覧、視聴してもらいたいものである。</p>		
平和文化の醸成の取組状況		
<p>2021年(令和3年)は悲願であった「核兵器禁止条約」が発効し、「被爆100年」に向けて新たなスタートとなった。この「被爆100年」は、被爆者がいない時代へのカウントダウンであり、それは国際社会に向けて核兵器の非人道性を訴え、国内外の次世代へ、被爆体験を語れる被爆者が限りなく少なくなる時代を意味し、そうした時代が到来しても、被爆地長崎が歩みを止めずに前進し続けるために平和を後押しする取組を開始されている。</p> <p>その取組は、これまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」と「核兵器廃絶の推進」の2つの柱に加え、令和3年度から新たに3つ目の柱として、より多くの人々が当事者として自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるよう、スポーツや芸術などを入り口に、日常の中に「平和の文化」を根付かせていく</p>		

「平和の文化の醸成」(被爆100年に向けた次の25年のとても重要なキーワード)である。

長崎市は、その入り口を増やす取組を進め、平和をつくる“当事者”を増やしていきたい。市が考える「平和の文化」は、「平和」を考え、つくることが当たり前だと思うような「文化」にしていこうとするものである。

令和3年度から実施している「平和の文化認定事業」は、自らができる平和の発信の取組であり、一例として、V.ファーレン長崎平和祈念活動の行進や、忘れないプロジェクト写真展 11時2分にシャッターを切ろう!、平和の祈りキッズゲルニカ in ながさき、ファッションショーなど実施されてきた。

その効果は、平和の文化認定事業として認定することで、その取組を広く周知することで応援し、平和の輪の広がりにつながっている。

また、令和3年度から実施している「平和の新しい伝え方応援事業」では、戦争から長い年月を経た世代にとって、被爆の実相などについて、共感を持って感じることはなかなか難しく、一方、今はSNSなどのデジタルツールの普及により誰もが気軽に情報発信できる時代であり、長崎市は、被爆の実相や核兵器についてより多くの人に届く新しいアイデアと伝え方を募集し、事業に対して最大 20 万円を補助している。一例として「被爆者のいまを伝えよう! フォトグラファー体験」や、「被爆して変形した瓶を波佐見焼で再現した、平和を発信する『祈りの花瓶』を海外に広げるためのwebサイトの英語版作成」など、映像や紙芝居など多岐にわたり毎年5つの事業が実施されている。その効果として、取組を支援したことで、時代に応じた新しい伝え方にチャレンジする機会の創出につながっているとのことである。

令和4年度からは、毎年9月～11月を、「平和の文化のキャンペーン」期間として設定し、スポーツや芸術などのイベント等と連携した取組を実施することで、平和の文化の醸成に向けた機運を盛り上げている。

令和5年度は、国際交流、芸術・文化、子育て・生涯学習、スポーツなど32の事業を実施。自分に合った平和の行動を見つけるきっかけづくりの取組は素晴らしいものであり、調布市の平和への取組にとっても参考になるものであった。



被爆体験次世代継承の推進では、被爆者の高齢化が進み、被爆者から直接体験を聞くことが難しくなる中、被爆体験を次世代に継承するため、被爆の実相を学び、伝え、継承していく事業を長崎平和推進協会に業務委託をし、実施されている。

また、青少年ピースボランティアを平成14年から開始され、15歳以上30歳未満130名が登録し、毎月1回勉強会を開催、「青少年ピースフォーラム」では平和式典にあわせて全国の自治体等が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年が一緒に被爆の実相や平和の尊さについて学び交流を深めている。

このフォーラムはピースボランティアが中心となって平和学習の進行やフィールドワークの案内などを行っている。

また、青少年平和交流では長崎市の中学生を沖縄に派遣し、双方の戦争被害について語りあうなど、学びや友情を深めている。調布市では、ピースメッセンジャーを被爆地へ派遣する平和派遣事業を実施している。ピースメッセンジャーが活動の継続のため、「ちょうふピース部」を令和5年度に立ち上げ、活動を開始していることから、今後調布市にもお越し頂き、青少年の交流の取組を実現したいものである。

未来を担う子どもたちに平和について考えてもらう機会の提供について、長崎市は平和学習教材「平和ナガサキ」を小中学生に配布している。また、被爆絵本の配布や配信、被爆紙芝居は全国から紙芝居を募集し、入賞作品は印刷をし、DVDも作成、ホームページでも公開している。また、市のホームページを全面リニューアルし、子ども向けコンテンツ「ながさきの平和」でも様々な検索ができるように取り組んでおり、調布市での次世代への平和継承に参考になるものであった。

語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）の証言者は現在55名、被爆2世のご家族の方より講話を聞かせて頂ける貴重な機会を頂いた。ご家族の体験を目の前で聞かせて頂き、自分ができる平和への取組を決意するとともに、世界の平和と全ての人の幸せを願う大変意義深きものとなった。

### 3 その他(今後の課題・調査研究すべきテーマ等)

文中に記載

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	木下安子
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
2024年10月2日（水）～3日（木）長崎市平和都市交流		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>○長崎平和公園・長崎原爆資料館（市立）・長崎原爆死没者追悼平和祈念館（国立）訪問</p> <p>○家族証言者講話（被爆2世のOさんより）</p> <p>○「平和の文化の醸成」及び「被爆体験次世代継承推進」事業について</p> <p>平和公園や原爆資料館は何度か訪れたことがあったが、核の使用に対して積極的な発言が国際的にも聞かれる昨今の世界情勢下での今回の訪問では、この経験を風化させず引き継がなければならないという思いをさらに強くした。今回お話を伺った家族証言者の方は、終戦2年後に生まれたということで、ご自身に原爆の記憶はないが、語り部としての活動に携わっている。被爆体験を語れる人が高齢化し、減少する中、長崎市では被爆体験をこうした次の語り部に託し残していく事業も実施している。現在、家族・交流証言者の登録者55人のうち、家族証言者は15人とどまる一方、交流証言者は40人いるということから、被爆体験を受け継ぐことへの市民の熱意を感じた。これは長崎市のこれまでの取組の成果としても捉えられるのではないだろうか。</p> <p>一方、長崎市はこれまでの平和行政の2つの柱「被爆の実相の継承」と「核兵器廃絶の推進」に3つ目の「平和の文化の醸成」を加え、芸術やスポーツ活動を入り口とした平和活動に新たなベクトルを設けている。その背景には、原爆投下から長い年月が経ち、今の新しい世代には現実味が伝わりにくく、恐怖心しか残らないこともあり、これまでの取組が必ずしも平和を求める思いの醸成に繋がらなくなっている現状があるという。既存の取組を単に継続するだけでなく、時代に合わせた継承のあり方を模索する必要性を、原爆を体験した長崎市でも認識していることに少なからず衝撃を受けた。長崎</p>		

市でさえそのような認識で新たな取組が必要となっているのであれば、被爆地を遠く離れた調布市では一層の工夫が求められるだろう。

10月3日には長崎市議会議長を表敬訪問させていただき、今後の調布市との連携の可能性などについて意見交換をすることができた。長崎市から語り部などを派遣する事業もあるということだ。やはり現地を訪れることで学ぶことの深さを考えるとピースメッセンジャーは今後も市の平和事業の中心に据えたいが、長崎から受け入れる事業もあわせて検討していく余地はあると思う。

立山防空壕は初めての訪問であった。長崎県の防空本部が設置されていた施設で、原爆の影響を直接受けなかったため建物が残っている。空襲警報の発令時にはここから各対応の指令が出されていた施設で、当時の様子そのままの姿が今なお生々しく残っていた。

平和について考えるとき常々思うのは、戦争を知ることと平和を作り出すことは同じではないということだ。戦争が平和の対極にあることはその通りで、戦争を知ることによって平和の尊さについて考えるきっかけにはなる。しかし、今実際に世界各地で戦争や紛争が起きており、その中の残虐な行為にはそれなりの大義名分がある。「戦争はしてはならない」というひと言で終わらせるにはあまりにも複雑な背景がある。それでもなお戦争を終結点とさせないためには、単に戦争の恐ろしさを知るだけではなく、子どもの頃から互いを尊重しながら対話で解決することを学んだり、社会から貧困や格差をなくす取組が欠かせない。平和を維持し、戦争の種を蒔かないためにも、一人ひとりが尊重され、人間らしい生活が送れる社会を作っていくために政治にできることを幅広く考えていきたい。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

2に記載

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	岸本 直子
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和6年度長崎市平和都市交流(10月2日・3日)		
2 実施結果に対する所感，意見等 (質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等)		
<p>訪問した場所</p> <p>■10/2(水) *長崎市平和公園 *原爆資料館</p> <p>*国立原爆死没者追悼平和祈念館 *追悼平和祈念館研究室にて</p> <p>被爆者の家族で、現在、被爆体験の語り部として活動している方からお話を伺った。</p> <p>■10/3(木)</p> <p>*長崎市議会を訪問し、議長にお話を伺う。</p> <p>*立山防空壕(長崎県防空本部跡)を見学</p> <p>.....</p>		
<p><b>所感</b></p> <p>先々代の調布市議会議長と当時の長崎市議会議長との縁で行われることとなった長崎平和都市交流事業に参加させていただいた。</p> <p>●長崎市内の訪問した場所は、以前、私自身も子どもを連れて、毎年行われる原水爆禁止世界大会の長崎大会に参加したことがあり、数年ぶりの各施設への訪問となった。参加した季節は真夏の猛暑だったため、原爆投下当時を思い起こさせるような季節だったが、今回は10月初旬の雨模様だったこともあり、以前とは違う感覚での参加となった。</p> <p>当時、幼かった長女・長男と一緒に原爆投下地点の見学、片足の鳥居を見て、山王神社境内の大クスノキの下で、戦時下の常備食すいとんを食べながら、戦争の悲惨さや当時の貧しい生活について子どもたちと学んだことを思い出していた。</p> <p>●長崎平和公園は、願いのゾーンとして位置づけられており、長崎出身の彫刻家による平和記念像が以前と変わらず立っていた。</p>		

三鷹市の「仙川平和公園」にも平和のシンボルとして故北村西望氏の平和祈念像があるが、同じ彫刻家の作品でもあり、三鷹の地にも何度か訪れ、アンネの日記ゆかりのバラや広島市から寄贈されたアオギリ 2 世の樹を見たことを思い出していた。

●長崎の平和祈念像は、何度も経年劣化対策をされ保存されている。

私たちが訪れた日は、平和学習の一環と思われる多くの小学生が訪れていた。そのほか、折鶴の塔、長崎の鐘を写真に収めつつ、平和公園の前身だった長崎刑務所浦上刑務支所跡の壁の一部を確認した。昔伺った時はスマホで簡単に写真は撮れなかったもので、ありとあらゆるものをメモ代わりに保存しておいた。

本来なら「無縁死没者追悼祈念堂」や「爆心地」にも行くべきだったが時間の都合で行けず反省している。

●原爆資料館では開館から 27 年経過とのことだが、私が訪問した時とほとんど変わらず貴重な当時の遺品などが展示されていた。

原爆投下の時間(11 時 2 分)で止まった柱時計、被爆した人々のお弁当箱や衣服などの遺品は、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさをリアルに知ることができ、今後の歴史を形成する上でも貴重で重要な財産であると再認識。

●国立原爆死没者追悼平和祈念館

この施設は 2003 年に開館とのこと。国立施設で原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律に基づいて恒久平和を祈念するための施設として長崎に設置され、その後、広島にも設置されたとのことだ。

主な役割は、被爆関連資料や情報収集などがあり、原爆死没者名簿の安置、被爆体験、手記の収集などが行われているとのこと。

集めた情報を来場者に知らせていくコーナーとともに、国際協力などを軸に外国からの来場者へもその内容を知らせる中身となっていた。

●印象的だったのは死没者の名簿(約 19 万人、名簿数は 200 冊超)が収められていた「追悼空間」だった。幻想的な場所ではあるが、原爆被害にあわれた多くの方が静かに眠れるようにと工夫した建造物があり、その被害の多さと命の重さを、胸に重たく実感したところである。

●施設訪問のあと、長崎市平和推進課担当より、「平和の文化の醸成」について、具体的な取組を説明いただき、目標が「核兵器のない平和な世界」で

あり、実現のために長崎が貢献することとして3つの柱＝1，被爆の実相の継承 2，核兵器廃絶の推進 3，平和の文化の醸成 を掲げ、粘り強い取組を行っている」と説明を受けた。

●印象的だったのは「平和の新しい伝え方応援事業」を令和3年度から実施し、被爆の実相や核兵器について、より多くの人に届く新しいアイデアと伝え方を募集し、事業に対して最大20万円の補助をしていることだ。

中身はさまざまに「被爆者の写真を撮るフォトグラファー体験」「被爆した当時のピンを加工して違う作品をつくる」、「被爆ピアノでつなぐひろしま・ながさき」など市民の発意の取組に対して補助しているのは画期的だ。そのほかに、原爆写真展にボランティアを組織し、「平和活動をビジネスに」をコンセプトにドキュメンタリー映像を制作する事業などにも補助している。

被爆地・長崎ならではの、他自治体をリードする取組であることを学んだ。

●市の事業の説明の後、「被爆体験次世代継承推進事業」について説明していただき、この事業では、県外原爆・平和展事業だけでなく、青少年ピースボランティア育成や青少年ピースフォーラム開催、市内中学生を沖縄へ派遣し戦跡や資料館の見学、那覇市内の中学生との交流の実施、平和学習発表会など、一歩も二歩も進んだ取組を行っていることに感銘を受けた。

●「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）」も印象深かったが、これまで何度も被爆者本人からリアルな体験談を伺い、その度に「こんなことを二度とくり返してはいけない」という思いを強めてきたが、長崎の被爆体験を語り継ぐ事業では、自身の被爆体験を任せたいと願う被爆者から、受け継ぎたい意思を持つ方が講話を行う事業は、今後の語り部事業、継承する形として有効な手法だと思った。

家族・交流証言の登録者数は113名とのことだが、家族証言者は15人、交流証言者は40人が活動しているとのこと。

この数自体は多くはないが、他の自治体に比べたらこうした活動に関わっている方が、これだけの人数いるということは、見習わなければならないと考えた。

●参加者の中に「こういう話を聞いたのは初めてだ」という方がおり、調布市が後援している平和事業の中でも「被爆体験者の語り部活動」をやっている

ること自体が知られていないのではないかと課題も感じた。

●調布市も長崎市も「平和への想い、決意」「二度と戦争の惨禍を繰り返さない社会をつくる」ということを、次の世代にどうつないでいくのかが大きなテーマであり、こうした先進自治体を手本にして、もっと深彫りした取組を調布市で進めていかななくてはならない。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

●調布市の平和事業「広島・長崎への子ども達の派遣事業」について、取組が終わると報告書が配られる。長崎の取組の比にならないものの、非核平和都市宣言を行った自治体としてこんな取組を行っているという報告書を長崎や広島にも進呈し、お互いの取組の交流をもっと深めて、調布市の更なる事業発展につなげるべきと考える。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	古川 陽菜
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
<p>令和6年度長崎市平和都市交流</p> <p>（平和公園、原爆資料館、原爆死没者追悼平和祈念館、「家族証言講話」、長崎市議会議長表敬訪問、立山防空壕）</p>		
2 実施結果に対する所感，意見等		
<p>（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）</p>		
<p>市議会議員団で長崎市の原爆関連の戦跡に触れ、平和行政の取組をお伺いするため、2日間の日程で受け入れて頂いた。</p> <p>原爆資料館では、長崎市の平和行政の新たな柱である「平和の文化の醸成」と被爆体験を次世代に継承するための具体的な取組についてお話を伺った。長崎市では県外の方々にも、原爆の悲惨さ、平和の大切さを知ってもらい、長崎市民の核兵器廃絶への願いを伝えるため、全国の自治体で「県外原爆・平和展」を行っており、令和5年までの30年間で延べ84の自治体で開催している。開催地の選定は自治体への意向調査の結果、希望した自治体との協議の末に開催を決めており、資料等の輸送費は長崎市に負担して頂け、開催する会場の借上料や広報費の負担のみで長崎の資料を展示できるとご回答頂いた。多摩地域の自治体では平成20年に府中市で開催されただけでも伺い、調布市で長崎の原爆関連資料を直接見ることができる機会の創出は有益であると考え、調布市においても開催を検討して頂きたいと思う。また、長崎市では次世代への被爆体験の継承のために15歳以上30歳未満の若者を対象に、青少年ピースボランティアの育成を行っており、令和6年3月末現在、130名の登録者がいるという。調布市が中学生を派遣している8月の「青少年ピースフォーラム」では、青少年ピースボランティアが中心となって、平和学習の進行やフィールドワークの案内などを行っているとのことである。平和の担い手となる長崎市の青少年ボランティアの育成事業について伺ったので、調布市においても中学生派遣事業の卒業生から成るちょうふピース部で活動する若者たちが中心となってイベントを開催するなど活動の場を広げていける可能性を感じた。</p>		



原爆資料館を見学した後に、原爆死没者追悼平和祈念館に移動し、原爆死没者の名簿が納められている追悼空間や被爆者の体験記を閲覧できる閲覧室などを見学した後に、被爆2世で家族証言者である大越富子さんから主に母親から聞いたという被爆体験のお話を伺った。大越さんの母親は爆心地から6 kmほど離れた親族の家におり、原爆投下から数日後に市内中心地に入り被爆したが、親戚以外の人からの証言が得られず、被爆者健康手帳を取得するまでに時間がかかったという。また、市内に救援で入った大越さんの父親も被爆している。終戦後、富子さんを妊娠した母親が丈夫な子を産めるか、育てていけるか不安になり、子どもをおろそうとしたというお話も伺い、胸が詰まり、被爆後の家族の葛藤、悩みなども伺え、非常に意義がある講演となったと思う。大越さんは、講話の最後に「命を大切にすること」や「選挙に行くこと」などについてもメッセージを発信されていた。

長崎市議会では、自身も被爆2世である岩永議長にお迎え頂き、平和行政施策についての意見交換を行い、今後も議会同士のつながりを生かしていきたいという話をさせて頂いた。議長の母親は被爆者であるが、自身の被爆体験を長年語らなかつたといい、被爆者が少なくなっている今が次世代への継承を考える上で重要な時期であると再認識した。また、調布市ではFC東京と協働して、小学生を被爆地等に派遣しているため、長崎市にも新しくスタジアムが完成したことから、子ども達の平和派遣事業にサッカーやスタジアムというつながりも生かしていければよいのではないかと考えた。

最後に見学した立山防空壕は、戦時中に空襲警報が発令されると県知事などの要人が集まる長崎県防空本部が置かれていた防空壕であり、実際に防空壕の内部に入り見学することができる。この防空壕は爆心地より約2.7 km離れ、山があることで被害が遮られており、展示からは原爆投下当初、被害の規模が分からずに誤報が伝えられたことや、時間が経つにつれて被害の大きさが徐々に分かっていく様子を知ることができ、原爆の被害を別の側面から学ぶことができる重要な戦跡であると感じた。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

全て文中に記載。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	須山妙子
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
長崎市平和都市交流視察		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>1) 長崎平和行政の新たな柱「平和の文化の醸成」について</p> <p>令和3年度に「核兵器禁止条約」が発効されたことを契機として、長崎市は核兵器のない平和な世界を実現するための活動をこれまでの被爆者中心の推進に加え国内外の多くの市民が行動する機会づくりが重要であると考え、芸術やスポーツなどを通してその活動の入り口を増やしていくとの取組方針を固めた。</p> <p>その取組の大きな一つが平和文化認定事業である。例えば令和4年度には「忘れないプロジェクト写真展 8月9日 11時2分にシャッターを切ろう」5年度には「長崎原爆忌平和祈念俳句大会」などが認定されている。</p> <p>もう一つが「平和の新しい伝え方応援事業」である。例えば令和4年度「被爆ピアノで繋ぐひろしま・ながさき」5年度「ジェンダーから核を考える動画プロジェクト」などが認定されている。デジタルツールの普及などにより実施されたが、デジタルよりリアルな事業が多かったことが興味深い。</p> <p>市民が自由にアイデアを出すことに予算をつけていく市の事業手法は調布市にとっても大いに参考になった。</p>		

## 2) 被爆体験次世代継承推進

被爆者の高齢化が進み、その体験を直接聞くことが難しくなる中、長崎市では公益財団法人長崎平和推進協会に業務委託し、次世代への継承を進めている。

原爆展の開催や、青少年ピースボランティアの育成など様々な事業が行われているが、中でも強く心に残ったのが青少年平和交流「少年平和と友情の翼」事業である。これは長崎市内の中学生を沖縄に派遣し、双方の戦争被害について伝えあう等学び、伝え、同世代との友情を深めるものである。同世代の友人から自身の曾祖母・曾祖父や親族の被爆体験を学び、平和について意見交流をしていくことはどれほど児童、生徒、若者にとって大いに刺激になり、平和意識の醸成に役立つかと思う。

これまで、議会同士で交流を進めてきたが、全ての議員が視察を行わせていただいたことにより、一旦交流を終了するという考えがあるが、せっかく結んできたご縁を、更に次世代に継承することに主眼を置いて推進していきたいと強く求めるものである。

## 3) 長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館・立山防空壕見学「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）」参加

次世代継承推進についてご説明いただき、資料館を案内してくださった長崎市の課長さんは被爆三世であり、また現在の長崎市議会議長さんもまた三世でいらっしゃった。79年前何割の市民が犠牲になったのか被爆の悲惨さとともに、終わったこと、過去のことでない今現在に続いている課題であり、日本の平和、世界の平和に責任を持って取り組んでいかなければならないことを改めて実感できた。

## 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

上述

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	宮本和実
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和6年度長崎市平和都市交流事業		
2 実施結果に対する所感，意見等  (質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等)		
<p>今回で3回目となる長崎市議会との交流事業。1日目は、平和祈念公園に現地視察をし原爆資料館や座学で被爆体験者2世の方からの講話をお聞きした。</p> <p>長崎市では令和3年度から、これまで取り組んできた「被爆の実相の継承」・「核兵器廃絶の推進」に加え、スポーツや芸術などを入り口として、日常の中に「平和の文化」を根付かせていく「平和の文化の醸成」を加えた3本の柱で取り組んでいる。これは、これまで被爆者を中心に取り組んできた事業であったが、被爆経験者がいなくなっても持続可能な仕組みが必要と考え作られた取組である。その入り口を増やすことで、平和を作る当事者を増やし「平和」を考え、作ることが当たり前だと思ふような「文化」にしていこうとするものである。</p> <p>長崎市では、「平和の文化」を根付かせる取組に対し、平和の文化認定事業を進めている。また、時代のニーズに合わせSNSなどのデジタルツールを活用した取組に対する補助制度も始めている。</p> <p>市内だけでなく長崎県外の方々にも平和の大切さを知ってもらうために、「原爆・平和展」を様々な地域で開催している。</p> <p>青少年ピースボランティア育成にも力を入れており、15歳から30歳未満の青少年を対象に現在約130名が登録され活動している。</p> <p>長崎市では、市内の中学生を沖縄に派遣し双方の戦争被害について伝え合うなどの交流も続けている。また、市内では8月9日を登校日としていることも特徴的である。</p> <p>今後の課題は、やはり被爆体験者がいなくなった後にどのように語り継</p>		

いでいくかという点である。現在の講話可能者は57名である。次世代の講話者をどのように養成していくかが鍵である。

実際に被爆者2世の方からお話をお聞きしたが、やはりリアルで感情も伝わる講話であった。

原爆資料館には多くの学生が訪れており、若い世代に平和の尊さを伝える機会になっている。私は、外国人の方々にももっと積極的にアプローチをするべきだと感じた。館内にも外国語の話せる案内者の配置などにも力を入れることも大切だと思う。

二日目は、防空壕へ現地視察した。当時の生々しさを感じる建物で、寒気さえ感じた。このような当時の建物を残すことの意味の深さを改めて思った。

本来アメリカ軍の投下目的地は小倉であったにもかかわらず天候不良のため長崎に変更になったなどの経緯を伺い、とても複雑な憤りを感じた。

この二日間の視察を通じ、核の恐ろしさや平和の大切さを痛感し心から被爆者の方々の無念な思いを共有した。この思いは、日本だけでなく全世界に向けて発信していくことが大変重要であると感じた。また、長崎市議会とも形にこだわらず、今後も連携を続けていけたら良いと思う。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

長崎市では、スポーツや芸術などを入り口に「平和の文化の醸成」に取り組んでいるので、お互いの市が応援しているJリーグチームの観戦と子供たちの交流などを関連付ける取組など一考の余地があるかと思う。

今では世界が長崎・広島に投下された原爆に注目している。日本が世界の先頭に立って核廃絶の声を上げて欲しいと心から願う。

第3号様式(第4関係)

<p>視察等個別部分報告書</p>	<p>作成者氏名</p>	<p>鈴木宗貴</p>
<p>1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）</p>		
<p>①長崎県長崎市 平和祈念事業について</p>		
<p>2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）</p>		
<p>① 長崎市における平和教育については、令和2年1月に、自ら被爆者であった当時の長崎市議会の佐藤議長の案内により会派視察を行い、施設見学及び教育等各担当から平和教育と平和祈念事業について、長時間にわたって説明を受けました。</p> <p>この際に、長崎市の特徴は「継承」と「自ら考え発信する力」にある。押し付けや恒例行事になっているのではという大学生からの指摘を受けて、平和教育に対する考え方を大きく修正し、小学1年生から中学3年生まで、体系的な教育プログラムを構築し、年10時間から20時間の授業時間を充てている。特に、爆心地の小中学校では、30～40時間を充てている。これにより、小中学生の原爆に対する意識が大きく向上した調査結果が出ている。</p> <p>また、反戦や反核の教育ではなく、世界の核兵器の歴史や状況もしっかりと教えている。</p> <p>全国各地に赴いての「原爆展」は、来年度から大学など教育機関も対象に広げ、その最初が三鷹市の「ICU」とのことである。</p> <p>と、今回の説明には無かった事項があったことをまず記載しておきます。</p> <p>今回、被爆2世の方から証言講話を受けて、非常に心打たれました。生の声はかけがえのないものであると実感しました。</p> <p>また、追悼平和祈念館は初めての視察となりましたが、被爆者自らが綴った膨大な記録からは、非常に強い思いが伝わりました。</p>		
<p>3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）</p>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・調布市での平和祈念事業での井の頭自然文化園 彫刻館の活用の検討</li> <li>・長崎市及び広島市生徒との相互交流事業の可能性の検討</li> </ul>		

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	大須賀 浩裕
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
長崎市平和都市交流		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
1) 平和公園 公園に原爆被害を象徴する北村西望氏作の平和祈念像があるが、この像の原型は武蔵野市・井の頭公園内のアトリエで制作された。この事実を市民に知ってもらおう努力を調布市がもっとするべきだと考える。		
2) 長崎原爆資料館 以前、家族と会派で行ったことがあるので、訪れるのは3回目となる。何回訪ねても資料館の入り口にある「長崎を最後の被爆地に」のメッセージのインパクトに圧倒される。修学旅行生らしき中高生が見学をしていたが、どこまで理解していたのだろうか。ファットマンの模型や被爆者の写真（特に子どもの死体写真）の前で説明員が詳しく説明すれば、より理解が深まると思われる。		
3) 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 平和祈念・死没者追悼空間などを見学後、被爆体験伝承者の話を聞くことができた。年々少なくなっている被爆体験者本人でなくても、伝承者の話は説得力があると感じた。 なお、祈念館では、被爆者の体験や平和への思いを次世代に語り継ぐため、「被爆体験講話者（被爆者本人）」、「原爆体験伝承者」、「家族証言者」、「被爆体験記朗読ボランティア」を全国に無料で派遣している。調布市においても、学校や地域などで行う平和学習において、被爆の実相や被爆者の平和への思いなどを直接学ぶ機会をもっと作ってほしいと思う。		
4) 立山防空壕		

初めて訪ねた。爆心地と防空壕の間に山があったおかげで破壊を免れたとのこと。貴重な戦争遺産だと思う。

3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

平和派遣で長崎市を訪ねる調布の中学生には被爆者本人、原爆体験伝承者などから体験を聞く機会をぜひ作ってほしい。